

草津市立矢倉小学校通信 令和2年8月19日 NO.9



# やぐら通信

～ひとみキラキラ豊かな心と体の矢倉っ子～

## 日記の思い出

子どもの頃、日記が毎日の宿題だった。今ではお決まりの音読や、計算練習、漢字練習は、ときどき出されたくらいである。夏休み中も、日記はあたりまえのように課せられた。どこにも出かけていないとか、いつもと同じ遊びしかしていないなどという理由で、何も書くことがないし、書けないなどと、言い訳は通用しない。1学期には、朝自習で書いていないと、放課後、書けるまで残された。だから、日記はとにかく書かねばならないものと観念させられた。こうなると、夏休みの日記は、書いていないとどうなることかと、こわくてたまらない宿題として取り組まざるを得なかった。1年生、2年生の頃は、そんな日記がいやでいやでしかたがなかった。何をどう書けばいいか、うまくみつけれなかったからだ。私が通っていた小学校では、1時間目がはじまるまでの自習時間が、前日の日記を書く時間となっていた。書きだしがうまく見つけられないときは、「きのう、ぼくは(わたしは)」を書きだしにするようにと教えられた。おそらく学校をあげて取り組んでいたのだろう。兄も弟も同様に日記を書いていたと記憶している。朝自習が始まると、学級の友だちは、「みつけた!」と、聞こえよがしに書き始めていく。が、私は書くことがみつからず、じっと鉛筆を握りしめ、じっと考え込んでいることが多かった。夏休みも、同じように兄や弟が「みつけた!」と、こちらをちらりと見て書き出すから、腹が立つやら悲しくなるやら、なんともつらい時間だった。

ところが、学年が進むにつれ、同じことが繰り返され、書くことがないはずの日々の生活でも、その一コマを切り取り、これを説明するように書けばいいことに気づいていく。夏休みの日記で言えば、朝、宿題の「夏の友」というワークブックを兄弟そろって取り組んでいるときのこと。兄がどんな問題を黙々と取り組み、弟とどんなおしゃべりをしながら取り組んだか。昼は、たいてい家の裏の谷川で魚捕りをするのだが、そのときどういう方法で捕ったか。別の日には、だれが転んでどうなったか、捕った魚をどうしたかなど、小さな一コマを詳しく描くように書くことで字数が稼げると発見したのである。やがて、作文のよしあしは、朝から晩までの「したことの概略、羅列」などといった通り一遍でなく、その瞬間を切り取るようにする方が、読みごたえが生まれ、いわゆる「よい作文」になると理解できた。

あのころ、日記を書くこと、生活を切りとり作文することについて、めんどうなこと、いやなことを大人たちは子どもにさせるものだと、どちらかといえばよくない受けとめをしていた。確かに、作文はめんどうなことであり、それが毎日となるとつらくなる。ところが、今となってはその苦しさのなかで何ごとかを手に入れたことが宝物となっていることに気づかされる。このことは作文に限ったことではないだろう。多くの子が熱中している野球やサッカーなどのスポーツも、ピアノやそろばん、習字もそうだ。何かを身につけ、学ぶということについては、楽しいときもあり、どうしてこんなことをせねばならないのかとつらくなるときもあるものだ。しかし、それを乗り越え、続けることができたこと、このことはかけがえのない事実なのである。これを繰り返したためていくことが、後にゆるぎない支えとして結実するといっただろう。

今日から2学期だ。これまでにない生活の仕方が求められている。そんな中で、子どもたちにはぜひとも続けられる何か、支えとなり、一生の宝となるものを見つけてもらいたいと願っている。

校長 大林道範